
とある侍の銀魂 (シルバーソウル)

白い奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある侍の銀魂 （シルバーソウル）

【Nコード】

N2894Y

【作者名】

白い奇術師

【あらすじ】

これは銀時達がフェイト達と共にジュエルシード事件を解決したあのお話。

銀時が今度いくところは科学が発展した都市、その名も『学園都市』。科学と魔術が交差するこの場所で銀さんは能力者と魔術師相手に大暴れ！

とある侍の銀魂 (シルバーソウル) (前書き)

新しい作品ですよろしく願いします by 作者

とある侍の銀魂（シルバーソウル）

ここはかぶき町にある万事屋銀ちゃんという何でも屋。万事屋銀ちゃんやんで社長椅子に座り、デスクの上に足を乗せ、ジャンプを見ている黒い服とズボンの上に着崩した白い青い波柄の着物を着た、銀髪天然パーマの死んだ魚のような目をした男性がいた。そうその人こそ、この万事屋銀ちゃんやんのオーナー『坂田銀時』ある。

銀時はこんなダメ人間ではあるが、知り合いのカラクリ技師がつくった転送装置で違う世界にいったさいに魔法少女と出会い、さらにはそこでとある事件を解決したのである。

今は元の世界に帰っている。ちなみにその装置、ここで働いてる従業員が壊したため使い物になりません。そのため転送装置壊した従業員は知り合いのカラクリ技師と共に転送装置を修理しているのである。

「ふああゝ…ひまだな…新八と神楽と定春はお妙の買い物手伝っていねーし…シロは源外のジーンさんのところに行ってるし…フェイトと話そうにも無線機にうどんの汁こぼして今、修理中だし…」

銀時はでかいあくびをしたあと、ひまだと呟く。

ちなみに新八と神楽はこの従業員で、定春は万事屋のペット、お妙は新八の姉、シロは転送装置を壊した従業員、源外は知り合いのカラクリ技師、フェイトは銀時が違う世界で知り合った魔法少女である。

「そうだ！シロの部屋からマンガでも借りるか」

銀時は立ち上がり、自分の寝室へと行く、寝室の戸を開け寝室の押し入れの戸に張ってあるドアが描かれているポスターの前に立つ、ポスターのドアノブ部分に手をおくと、ドアが開く。なぜ、こうなるのかというとこれはシロが使う亜神術である。亜神術に関してはリリカル銀魂のほうを見てください。

「さーと、今日はこち亀でも見るか…」

銀時はシロの部屋へと入っていく、この部屋はシロの寝るのにしよする布団を含め、いろいろなマンガや本、などの娯楽がある戸棚があった。

「ん？」

銀時はテーブルの上に何かあるのに気づいた、それは白い色した携帯電話だった。

「ケータイ？あいついつの間にこんなもの買ったんだ？」

銀時はシロが買った携帯電話だと思いながら、携帯電話を掴み、自分の前まで持ってくる。

「……………」

銀時はシロのケータイを見て、考えてた。

「開けてみよ」

銀時は興味本意で携帯電話を開く。

開けて見ると何もうつっていない黒いディスプレイ画面が無数の文字が埋まり、ディスプレイ画面が白に変わる。すると、画面から粒子のようなものが出て、銀時の左手首にまとわりつき、銀色のデジタル腕時計へっ変わる。

「な…なんだこれ!？」

銀時は急に腕時計が現れたことに驚き、携帯電話を自分の足元に落とす。

すると…

「ん？」

銀時は足元に違和感を感じた。恐る恐る足元を見ると白い円形の形をしたものができ、銀時はゆっくりと白い円形に沈んでいく。

「な…なにこれエエエエ!！」

銀時は叫ぶがどんどん沈んでいき、もう腰の方まで沈んでいた。

「ふんごおおおおおお!！」

銀時は歯を食いしばり、円形のふちを掴んで脱出を試みる。みるみる銀時の体が白い円形から出てくる。

「ふんごおおおお……つてあれ？」

銀時は齒を食いしばる表情から間抜けな表情へと変わる。

「止まった……のか？」

銀時はふちに手を掴んだまま、白い円形を見回した。そう、沈むのが止まったのだ。

だがしばらくすると…

「ぎゃ ああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！」

銀時の体は急に早く沈んでしまった。

銀時が完全に沈むと白い円形も小さくなり消えてしまった。

とある侍の銀魂 (シルバーソウル) (後書き)

質問をお願いします by 作者

第一訓 来た場所は見知らぬ場所だった（前書き）

シロ「作者さん何でこの作品作ったの？」

作者「やってみたかったから」

シロ「……そう」

第一訓 来た場所は見知らぬ場所だった

「う…うん」

銀時は意識を取り戻し目を開ける、体を起こし辺りを見回した、そこはどこかの路地裏だった。

「あれ…もしかしてまた、違う世界に来ちゃったかな…」

銀時は違う世界に来たと思いながら、ひきつった笑みを浮かべる。

「しかたね…寝るか」

銀時は開き直り普通の表情になる。寝ることを思いついた銀時は横になり再び寝る。

「がーごーがーごーZZZZ」

銀時はいびきをかきながら完全に眠りに入ってしまった。

「でさーそれでよ…」

「おい、あれ見ろよ!」

すると6人のいかつい顔した不良グループが話をしながらやって来て、グループの1人が銀時を見つけ指差す。

「何だこいつ?」

「知るか」

「しかし、見慣れねえ服着てんなこいつ」

不良グループは銀時に近づき、ある人は誰かと考え、ある人は知るかと答え、またある人は銀時の服装を珍しそうに見つめる。

グループの中で一番ガタイがいい男性が銀時のすぐそばまでやってくる。おそらくリーダーであろう。

「いつまで寝てんだ？起きろよオラァ！！」

リーダーは銀時の腹に蹴りを入れこむ。

普通の人なら、痛みで起きて悶え苦しむ蹴りである、しかし、それは普通の人ではの話し、銀時は普段コンクリートを破壊するような攻撃を受けて生活をしてる人なので、今の不良の蹴りなんて効くわけがない。正直今の蹴りの威力はダメガネの新八よりも弱かった。

「何なんだよ…せつかく気持ちよく寝てたのによお……」

銀時は眠りから覚めて、何事もなかったように立ち上がる。

不良のグループの中で、最も力が強い男の蹴りを無防備な腹に受けたにも関わらず、銀時は何事もなく立ち上がる。

不良グループから見れば、銀時の反応は常軌を逸しているものである。

しかし、その反応を見て男達はある一つの確信を得る。

「デメエ…もしかして能力者か？」

リーダー格の男が銀時に尋ねる。

「は？能力者？」

銀時は聞き慣れ言葉を聞き、訳がわからないような表情になる。

「とぼけてんじゃねーよ！俺の蹴りをくらってそんな涼しい顔でいられるわけねーだろ！」

リーダー格の男が銀時に向かって怒鳴る。

（能力者？もしかしてシロや魔導師と同じようなことができる奴らなのか？）

銀時は能力者と言う言葉で頭がいっぱいで男の言ってることなど聞いてなかった。しかし、ふとある言葉を思い出した。

（あれ？腹に蹴り？）

銀時は腹を見た、そこには服に蹴られて汚れたあとが残っていた。

「能力者だとわかったら、ただで帰すわけにはいかねー…って聞いてんのかテメエ！」

何やらぼーっとしている銀時にリーダー格の男は怒鳴る。

「おい、これはテメエがやったのか？」

「あ？はっ！だったら何だっただよ！」

銀時の言葉に一瞬戸惑うが、リーダー格の男は続ける。

「俺これしか服持ってたねーのに…」

銀時はそう言いながら握りこぶしを作る。

「何汚してんだテメエエエエエエエエエエ！！！」

バキッ！

「ぐへっ！」

ドサッ！

銀時はリーダー格の男の顔を殴りつけ、男は3メートルくらい飛び、地面に叩きつけられ気絶する。

「り…リーダーアアアアアア！？」

「よくもリーダーを…テメエらまとめてかれ！」

「「「おお！！」「」」

リーダー格の男がやられたことに叫ぶ人もいれば、リーダーのために銀時をやっつけようと残りのグループをに指揮するやつもいれば、その指揮に従うやつもいた。

しかし、相手が悪かった。

「うっ……」

辺りに呻き声が聞こえた。

声の主は、一人だけ立っている銀時の周りに倒れている不良グループであった。

「……デメエ……化け物かよ……」

一人の男が絞り出すような声で言う。

それもそのはず。

銀時はリーダー格の男を抜いた、不良グループと銀時つまり、5vs1という状況にも関わらず、不良グループは銀時に触れることはかなわず、あっという間に銀時に倒されたのだ。

拳一つで、しかも一撃で倒されたのだ。

人数が勝っていると油断をしていた面があったが、そんな言い訳で片づけられないほどの実力を感じるしかなかった。

「デメエ……何て能力使いやがった……」

仰向けに気絶していたリーダー格の男が顔を上げ無能力者なのにも関わらず、この世界で常軌を逸した実力を持つ銀時に疑問を持ち尋ねる。

「あゝ……んじゃあ『糖分王』で」

銀時は考えたあと、適当に答えた。

（（んな能力あるかよ）∴ガクッ）（

不良グループはそう叫びたかったが、思うように声が出ずに再び意識が闇に落ちたのであった。

第一訓 来た場所は見知らぬ場所だった（後書き）

とりあえず質問プリーズ！

第二訓 お嬢様口調の人っているのかな？（前書き）

シロ「一応、今回はとあるシリーズの原作キャラがでてくるよ、誰だかわかるかな？それより、僕の出番まだかな？」

第二訓 お嬢様口調の人っているのかな？

「さうで、これからどうするかが問題だが…」

不良グループをボコリ終えた銀時は頭をかきながらこれからどうするかを考えていた。

「ちよつと、そのあなた」

「ん？」

後ろから声が聞こえてきてので、銀時は後ろを振り返った。

そこには、夏服らしい半袖の学生服と薄い茶色のベストとミニスカートを着用し、赤い髪をツインテールにしている少女が立っていた。

「ジャッジメント風紀委員ですの。スキルアウトがよつてたかつて人を襲っている
と報告を受け来てみました…」

少女は『風紀委員』と書かれた緑色の腕章を見せた後、少女は倒れている不良達ことスキルアウトを見ながら言い続ける。

「どうやらあなた一人でスキルアウトを片付けたらしいですね」

そして、少女は銀時に顔を向けて言う。

「（え？スキルアウト？ジャッジメント？何だよそれ…とにかくあのガキに捕まっちゃったならなんかめんどーなことになるな…とにかくここから離れるか…）あゝそうなんすよ。こいつら金よこせって

言つもんでさ、それで俺が断つたら、急にキレて襲いかかってきたんだよ。それで、俺が反撃をしたわけ」

銀時は勘で目の前の少女に捕まればめんどーなことが起きると予想し、適当なことを言つてごまかす。

「なるほど…ですからスキルアウト達が全員伸びてたわけなのですね」

少女は銀時の適当な言い訳を信じたのか、腕を組みながら納得する。

「そ、そうなんすよ！じゃあ、俺は用事があるからこれで…」

銀時は少女に背を向けて、走つてこの場を立ち去る。

「ちょっと、お待ちなさい！まだ話しが…つて速っ！」

少女が銀時を止めようとするが、少女が止める前に銀時がすごい速さこの場から逃げる。

銀時の常人を越える速さを見て少女は驚く、こうして少女が驚いてる間に銀時の姿はもう見えなくなっていた。

「一体何だつたんですの？」

一人この場にポツンと立っている少女はこう言つしかなかった。

その頃、銀さん

「よし、ここまで来たら大丈夫だろ…」

少女から逃げて来た銀時がいた。

「さーて…本当にこれからどうしよう…」

銀時はさらにこれからどうするか考える。

『とりあえず…服装変えたら？何かこの世界では目立つようだしその服』

どこからか声が聞こえてきて銀時に服装が目立つと指摘する。

「服変えるって…そんな金どこにあんだよ…って俺だれと話してんだ？」

頭をがしがしとかいて答える銀時だが、自分が誰と話しているのかという疑問を持つ。

『ここですよ。ここ、旦那さんの左手首にあります』

「は？左手首？」

声の主が左手首に言い、銀時は左手首にある銀色のデジタル腕時計を見る。

『どうも旦那さん』

「あ…どうも…」

腕時計があいさつをして、銀時も普通にあいさつを返す。

『あれ？しゃべるデジタル腕時計が目のあるのに驚かないんですか？』

「しゃべる刀とか、亜神とか、魔導師とか見てきたんだ。しゃべる腕時計ぐらいでもう驚きやしねーよ」

デジタル腕時計の質問に銀時が答える。

「つーか、テメエは何者だ？」

銀時は目を細めながら腕時計に尋ねる。

『あ！紹介していませんでしたね。私はシロ様に作られたつけてるだけで簡単な亜神術と腕時計としての機能が使える簡易亜神術使用補助機のウォッチです。以後お見知りおきを』

腕時計ことウォッチは銀時に自己紹介をする。

「なんでシロはテメエを作ったんだ？」

バンバンと亜神術を使ってるシロの姿を思い浮かべながら、なぜシロがウォッチを作ったかと銀時が尋ねる。

『はい、シロ様は亜神術を使うためのエネルギーは無限にあります
が、亜神術を使い続けると頭が痛くなったりと体に負担がかかるの
です。ですから負担を軽減するために簡単な亜神術を使う際に負担
がかからないように私が作られたわけです』

「なるほど…」

ウォッチの説明に銀時は半分納得する

『あと私は試作機ですが、人間にも使えますし、服を変えることぐ
らいならできますよ』

「マジでか!？」

「はいマジです旦那さん」

ウォッチの言葉に銀時はマジかと尋ねウォッチもマジですと答える。

「……………」

『どうしたんですか旦那さん?そんな思いつめた顔をしちゃって』

銀時が何かを考えていたので、ウォッチが声をかけてみる。

「なあ…一ついいか？」

『なんですか?』

銀時の一言にウォッチは尋ねる。

「服を変えた時にお前がとれたら、俺もしかして全裸に…」

『なりません！とれても元着ていた服装に戻るだけです！試作機だからと言ってなめないでください！つーかそれどこのT O L O V E ですか！』

銀時の言葉を聞いたウォッチはツツコンだ。

「わかったって！つーか、うるせーよ、長げーよ、くどいよお前のツツコミ」

『なんですと！』

銀時は理解したあと、ウォッチのツツコミを指摘する。指摘されたウォッチは声を上げる。

「ともかく、シロが助けに来るまでの間よろしく頼むわウォッチ」

『えっ？…あっはいわかりました旦那さん』

銀時が急に自分のことを頼ってくれてることに言葉を無くすも、すぐにわかりましたと答える。

「じゃあ、まずは自然にとけ込めるくらいの服に変えてくれねーか？」

『わかりました。では…トランス スーツ』

ポンッ

銀時のリクエストに答え、ウォッチは変身系及び変装系亜神術をトランスを唱える。

銀時の体が白い煙に包まれる。煙がおさまると服が変わった銀時の姿が出てきた。

『どうですか？自然にとけ込めそうな服ですよ』

「どこが自然にとけ込める服なんだああ！！？」

銀時は怒鳴った、なぜなら銀時の着ていたのはアクリイみたいな顔の白い毛に包まれた二足歩行の生き物の着ぐるみ…つまりトリコに出てくるGTロボの着ぐるみを着ていたからだ。

「俺が言ったのは周りの奴らととけ込める服装だ！確かに自然ならとけ込めるけど！ここじゃ浮くから浮きまくりだから！」

銀時はウォッチに向かってツツコミまくる。

『わかりました。では、次はドラゴンボールの悟空がいつも着ている服で…』

「話し聞いてたああ！！？」

ウォッチは理解したと自分で言いながらも、真面目なのかふざけているのか悟空の服をチョイスする。

銀時はまた、ウォッチにツツコミを入れた。

その後、いろいろウォッチと口論になり10分後によやく白衣とワイシャツ、だらしなくつけたネクタイ、ズボン…すなわち銀八先生の格好になったとのこと。

第二訓 お嬢様口調の人っているのかな？（後書き）

第三訓 違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ（前書き）

シロ「さてさて今日も始まり始まり」

第三訓 違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ

銀時はズボンとワイシャツとだらしなくつけたネクタイ、ワイシャツの上には白衣といった服装をしながら昼間の表通りを歩いていた。

銀時は周りを見た、そこには西洋風の建物が並び、遠くには白い巨大風車やビルの群れ、青い空には電子掲示板がついた飛行船、近くにはドラム缶の形をしたゴミを拾ってるロボット。

「かなり技術が進んでんだなここ」

『たしかに、ここまで技術を進歩させたのは大したものですよ』

銀時とウォッチは周りの技術力を見て、感想を述べる。

「やっぱりここにも天人はいるのか…ってかお前人前で喋るなバレルだろ」

『大丈夫です。私の声は旦那さんだけに聞こえるようにしていますから』

銀時はこの世界にも天人（銀時の住んでる世界にいる宇宙人のこと）がいるのかと思ったあと、ウォッチに喋るなと警告する。

ウォッチは心配ご無用といった声色で銀時に言う。

「まあそれならいいか…おっ！あれは！」

銀時は納得した後、輝いた表情で何かを見つける。

銀時が目にしたのは本屋の表の本の棚にあった銀時の愛読書、『週

刊少年ジャンプ』だった。

『どうしたんですか？旦那さ…「ジャンプウウウウウー！」んんんんん！！！？？』

ウォッチが言い切る前に銀時は本屋の前まで走り出した。ウォッチは銀時が急に走り出したためかなりへんな奇声を上げた。

「まさかここにもジャンプがあるとは、思ってもいなかったぜ」

銀時が本屋の表に置いてある棚の前まで来ると、ジャンプを手に入れようと手を伸ばそうとしたその時、銀時とは違う方向から誰かの手が伸びてきた。

そしてジャンプに伸びる、二本の手はピタッと止まった。

「ん？」

銀時と隣にいる少女は、互いに顔を見合わせた。

相手は茶髪で見た目は中学生で先ほど会った赤い髪の少女と同じ学生服を着ていた。だが銀時は少女の服装を見ても別にヤバイとは思わなかった。なぜなら、銀時はジャンプを読むことで頭がいっぱいだからだ。

「え？オタクジャンプ買いに？」

「アンタもジャンプ？」

銀時と少女は互いに目的が同じであることが分かった。

「まいったなー…一冊しかねえや」

「どうする？」

一冊しかないジャンプをどうするか悩む二人。

「まあアンタには悪いけど、こういうのは普通は年下優先よね。じやあそういうことで」

「オイオイ、ちょっと待てよ」

ジャンプを取り買うために銀時に背を向け本屋に入ろうとする少女の肩を掴み、銀時は言った。

「何よ？」

少女はしかめっ面で銀時の方を向く。

「何勝手に持っでこうしてるんだ？コレは俺が先に見つけたジャンプだ。俺が貰ってく」

そして銀時もジャンプを少女にとられぬように強く掴んだ。

「は？何を言っでんのよアンタ。このジャンプは私が先にこの本屋で見つけた物よ。分かったらその手を離してくれないかしら？」

「テツメ……………」

銀時は少女の言葉に青筋を浮かべた。銀時はひきつった笑みを浮か

べながら、ジャンプを掴んでる手に更に力を込め自分の元へと引き寄せる。

「馬鹿言ってんじゃねーぞ。俺なんか、この店を見つけた瞬間にジャンプの存在を感じ取ったんだよ。俺の方が早い！」

「何言ってんのよ。私はジャンプがあるこの地区に来た瞬間から知っていたわよ！」

「俺なんか、アレだよ？この世に生まれた瞬間から、この店の事知ってたよ？」

アホな言い合いを続けていく内に両者の中でイライラが募っていく。どちらも一歩も引き下がないので、時間だけが過ぎていった。先にキレたのは銀時だった。

「いい加減にしろよクソガキ！お前みたいなガキにはジャンプなんて早えーんだよ！コ。コ。の。ラえもんでも読んでいろや！」

「ガキっていうな！！私は中学生よ！！それよりその手を離しなさい！」

「お前がその手を離せ！そうすれば全てが丸くおさまるんだよ…ってあれ？これジャンプNEXTじゃね？」

「えっ！？ あ！本当にジャンプNEXTだわ…」

銀時と少女はジャンプを取り合い睨み合っていると、銀時が取り合っ

てるのがジャンプNEXTであることに気づく、少女は銀時の言葉に驚き、銀時からジャンプを奪い表紙を確かめるとそこにはジャンプNEXTと書いてあった。

「いや、最後のジャンプが買えて、本当によかったわ」

「え？」

銀時と少女は最後のジャンプを買ったという言葉を聞き呆然とした表情で本屋の入り口を見た、そこにはジャンプを持ってる男子学生の姿があった。

「帰って読も」

そう言う男子学生は呆然と突っ立っている銀時と少女の横を横切り帰っていった。

「あんたのせいで…」

「へ！？」

ジャンプNEXTを棚に戻したような音がした後、少女の怒りに満ちた声が銀時の前から聞こえてきたので銀時は前を見た、そこには顔を俯かせ拳を握りしめた怒りでプルプルと体を震わせてる少女の姿があった。

「ま…まてガキ！ひとまず落ち着け！ここは冷静になれ！」

「誰がガキですって…?」
バチバチッ

銀時は宥めようとしたつもりがさらに少女の怒りのボルテージをあげてしまい、体中を青白い光が纏い、前髪から電気を放ち初めている。これはまさしくぶちキレてるという証拠である。

(えええええ!?!何、何なの!?!こいつ体中から電気出てバチバチ
いつてるんですけどオオオ!?!)

銀時は驚いた表情をしながら心の中でそう思う。そして危機を感じたのか顔から一筋の汗を流し、後ろへと数歩後退りをする。

「だいたい私には…御坂美琴っていう名前があんのよっ!?!?!」

少女の前髪から電撃がまるで槍のように銀時に向かって放たれた。

目標に向かっていく電撃の速さに成すすべがなく、電撃に当たり銀時は倒れる…はずだった。

「…え!?!そんな!?!」

御坂美琴と名乗る少女は驚いていた、なぜなら自分が見ている光景があまりにも信じられないものだからである。

「バツキャツロオオオ！！危ねーじゃねーか！！」

「私の電撃を避けた…」

そこには、美琴の電撃をなんとか避けた銀時がいた。美琴は自分の電撃が避けられたことを信じられずにいた。

（私の狙いがはずれたわけでも、あいつが軌道をずらしたわけでもないのにあの至近距離の電撃を避けるなんてあいつ本当に人間なの！？）

美琴は自分が狙いを定めて電撃を撃つたことの確認と、コンクリートの歩道に残る電撃の後を見て軌道をずらされていないことの確認をした後、至近距離の電撃を避けた銀時を見て本当に自分と同じ人間なのかと疑問に思う。

（まさか…あいつ能力者！？）

美琴は頭の中で一つの仮説を立てたその時。

「ねえアンタ…」

美琴は銀時に声をかけようとするが銀時の姿はどこにも無かった。

美琴は能力者がどうか否かを知ることができなかった。ただ、一つだけ知ることができたことは

「に…逃げられたあああああ！！」

銀時がこの場から逃げたことである。

美琴から離れて100メートルの場所。

「ふう…やっと逃げ切れたぜ」

逃げてきた銀時はこの場で止まり、汗を手で拭う。

「ちょっとそこのあなた」

「あ？」

銀時の後ろから誰かが声をかけてかたので銀時は後ろを振り向く。そこには、スーツ姿の男性が立っていた。

「誰だあんた？」

「申し遅れました私は九十九つくもはじゅうめと申します。実はあなたに折り入って頼みがあります」

スーツ姿の黒縁メガネの男性は自己紹介をし、頼みがあると申し出

る。

「頼みだア？」

銀時は言う。

「ええ…頼みというのは…」

この男性の頼みが思わぬことに繋がることは銀時はまだ何も思わなかったであろう。

第三訓 違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ（後書き）

作者「こんな終わりがたになってすいません。でもネタバレにしたくはなかったの…」

第四訓 あっち向いてホイ！（前書き）

ウォッチ『とりあえず始まります』

第四訓 あっち向いてホイ！

ここは常磐台中学、学園都市でも5本指に入る有名私立中学校である。

そして、ここ2年生の教室では担当の先生がくるまで生徒たちは楽しくおしゃべりしたり、本を読んだり、椅子に座って待っていました。

（昨日はさんざんな目に合っちゃったなー…）

そう思いながら頼杖をついてるのは、昨日本屋の前で銀時とジャンプの取り合いをしていた少女『御坂美琴』である。

「（結局あいつのせいでジャンプ読むだけに遠くのコンビニに行くはめになっちゃったじゃない…）ハア…」

美琴は銀時の顔を思い浮かべながら、ため息をつく。

ガラガラ

「はーい…じゃあ席についてー」

教室の扉が開き、今回の授業を担当する教師が入ってくる。

（あれ？声が違う？新しい教師…えっ！？）

美琴がいつもの授業を担当している教師と声が違うことに気づき顔を上げ教卓を見してみる。しかし、教師の顔を見て美琴は啞然とする。

なぜなら…

「どーも…何やかんやでこのクラスの授業を受け持つことになった坂田銀八です」

教卓ににいるのが昨日ジャンプの取り合いをした男 『坂田銀時』だったからである。ただ一つだけ銀時と違うところはメガネをつけているというところである。

（な…何であいつがいんのよ！…しかもなんやかんやって何！？）

美琴は心の中で叫びながらツッコむ。

「他の教師がどんな教え方をしてるかは知りませんが…まあ俺は俺のやり方でやるんで」

銀時は気だるい声とやる気が無い態度で生徒たちに自分の教えかたを説明する。

「ねえ…ホントにあれ教師？」

「さあ…悪い人じゃなさそうだけど…やる気が全然ないよね」

「でも何か厳しそうじゃない…？」

美琴を除く生徒たちは銀時を見てヒソヒソと銀時のやる気がない態度を見て、そのことについて話し合う。

「はい…じゃあいきなりですが授業に入ります」

銀時はそう言いながらカバンから教材を出す。

（こんな奴に授業が出来るのかしら…前から思ってたけど何なのよあの木刀…）

美琴は銀時を見て、授業ができるのかと疑問に思う。そして次に美琴は銀時の腰にさしてある木刀を見て気になり始める。

「じゃあ『ナ。ニ。国物語 第一章 ラ。オ。と。女』を開いてー」

銀時はナ。ニ。国物語 第一章 ラ。オ。と。女の小説をカバンから取りだし、生徒たちに開くように促す。

「は……？」

美琴は銀時の行動に目が点になるほど呆然とする。

「はい、ここ四兄妹の次男が魔女に他の兄妹の場所を教えるシーンですが…お前兄妹売ってんじゃねーよデブ、とか思った奴、思いたいのはやまやまだろうがそんなこと言うのは止めましょう」

銀時は訳がわからないことを言い続ける。

「……………」

美琴もどつという言葉を返せば良いのか見つからなくただ黙って銀時を見ていた。

「はい…じゃー次男と魔女はどういう経緯で会ったのか50字以内で答えて下さい」

銀時は授業内容を言い、生徒に答えて下さいと言う。

（こ…国語の授業…？…ていうかそんな小説今持っていないわよ！）

美琴はこれが国語の授業であることを察した後、美琴そんな小説は持っていないと心の中で叫ぶ。

「はいじゃあそこのお前、代表で答えてー」

「げっ…え、えーっと……すいませーん、実は教材忘れてしまって…」

「じゃー廊下に立ってなさい」

美琴の言い訳を言ったすぐ後に銀時は美琴に廊下に立つように言う。

「なっ…ろ、廊下って……」美琴は廊下に立つことが納得いかなかった。

「10分間立ってたら中に入ってきていいからな」

（あ、あいつ…後で覚えてなさいよ…！）

銀時の無茶苦茶な授業や廊下に立つてると言われたことにより美琴は怒りで拳を握りしめながら銀時に復讐を誓うのであった。

放課後

「あーもう！イライラするわね！」

イライラしている美琴は両手で頭をガシガシとかいていた。

「わ…私のお姉様を廊下に立たせるなど…その教師…この黒子が必ずや縛り首に…」

美琴を廊下に立たせた銀時を縛り首宣言した赤い髪をツインテールにして束ねた彼女の名前は白井黒子^{しらくろこ}。美琴と同じ常磐台中学の生徒で美琴のことを『お姉さま』と呼び慕っている後輩でありルームメイトである。

ちなみに風紀委員であり、177支部に所属している。
ジャッジメント

「そこまではしなくてもいいけどさ…あんなの教師として有り得ないってことよ！」

黒子の縛り首宣言をやり過ぎとツッコむ美琴だがやっぱり銀時の行動はあり得ないと言いつつ怒る。

「いやー、でもその人ってなかなか凄いいんじゃないですか？」

美琴とは違い銀時のことを凄いと評価する黒いロングヘアに白梅の花を模した髪飾りをつけてる彼女の名前は佐天涙子^{さてなみ}。美琴や黒子とは違い柵川中学の生徒である。

美琴「へ？」

「だって…レベル5第三位の御坂さんに向かって『廊下に立ってるですよ？』」

佐天涙子は廊下に立ってると言わせたことを指摘する。

「たしかに…普通の人じゃそんなこと言えませんか…」

佐天の言うことに納得している、黒いショートヘアと頭の上に花の造花が大量にあるカチューシャをつけている彼女の名前は初春^{ついはるか}飾利である。佐天涙子と同じ柵川中学の生徒で、佐天とは級友でもある。

ちなみに黒子と同じ177支部に所属するジャッジメントであり運動能力はないが情報処理能力には長けている。

「人事だと思って…とにかく、私はあいつを教師だなんて絶対認めないわ！」

美琴は歯を噛み締め、拳を握りしめ、銀時のことを教師として認めないと宣言する。

「ねえ御坂さん、それってどんな感じの人なんですか？」

佐天は銀時がどのような感じの人物なのか気になり、美琴に尋ねてみる。

「え？そうね…白髪頭の天然パーマで死んだ魚みたいな目で何故か木刀持ってて…要はやる気のなさそうなダメな大人よ…あゝもう！

！思い出すだけで腹が立つてくるわ！！」

佐天が尋ねてきたことにより美琴は普通の表情に戻り、顎に手を当てながら銀時の特徴を思い出す。

特徴を言い、更にはダメな大人と評価したあと銀時を思い出した美琴は再び怒りだす。

「あの人みたいな感じですか？」

佐天は前から来る人物を指さした。

「あーそうそう、ちょうどあんな感じの……」

美琴は前から来る人物を見たあと、表情が険しくなった。

「さてと……さつさとあいつが用意してくれたマンションを探さねーと……」

そこにはマンションを探している銀時の姿があった。銀時はしばらく歩き美琴たちとすれ違った。

「あら、昨日の殿方ではありませんか」

黒子は銀時が昨日会った人物であることを知る。

「……ごめん、ちょっと行ってくる」

「え？ちよつと御坂さん……」

美琴は黒子たちにそう言ったあと佐天の制止を聞かずに早歩きで銀

時の方へ行く。

「ちょっと待ちなさい！」

美琴は銀時の近くへとたどり着き呼び掛ける。

「ん…何だ、さっきのガキじゃねーか」

銀時は振り返り、美琴を確認する。

「ガキじゃないわよ！…それに昨日と今日はよくもやってくれたわね！！」

「…廊下に立たせたくらいでキレるとか最近のガキはカルシウム足りてねーな」

銀時は美琴のキレ具合を見てカルシウムが足りないと判断する。

「だから…あたしはガキじゃないって言ってるでしょ！」

美琴はさらにガキ呼ばわりされたことに怒る。

「はいはい分かったから…イチゴ牛乳でも飲んで良い子して寝とけ、な？」

だが銀時は美琴の子供扱いを止めずに、終いには美琴は銀時にイチゴ牛乳飲んで寝とけと言われてしまう。ブチッ

「……完っ全に頭に來たわ、あんた…あたしと勝負しなさい！」

銀時の言動にキレ、怒りが頂点に達した美琴は銀時に向かって人差し指を突き付ける。

「はあ…?」

銀時は訳がわからずに首を傾げる。

「勝負だア? アホ拔かせ、んなメンドくせーことやってらんねーよ…そんなじゃ」

銀時はそんなメンドくさそうなことに付き合っはすもなく、美琴に背を向けようとする。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ!」

美琴は完全に背が向く前に銀時を止めようとする。

「俺アお前と違って忙しいの…第一そんなことしたって何の意味もねーだろうが」

銀時は勝負しても何も意味がないということ在美琴に言う。

「アンタがあたしを子供だって舐めて馬鹿にするからでしょ!」

美琴は自分を馬鹿にしたことを理由にする。

「別に舐めてねーよ、お前を舐めるくらいならレロレロキャンディー舐めるわ」

銀時は美琴のことを舐めていないといい、さらには舐めるくらいならレロレロキャンディーを舐めると言う。

「なっ…!？」

銀時はレロレロキャンディーと比べられたことに驚く。

「それに…ガキにガキって言って何がワリーってんだ？」

銀時は美琴にガキにガキって言って何が悪いと指摘する。

「だからあたしは……」

「自分のことがガキって認められねーウチはまだガキなんだよ。自分がガキだって理解して初めて子供は大人への階段登るもんなの。大人になりてーならてめーがガキだって早く気付くんだな、よく覚えとけよガキ」

美琴は言い返そうとするが、銀時が美琴にガキと大人に関する説教をする。

「……………」

銀時の説教には説得力があり、美琴は返す言葉が見つからなかった。

黒子たちは遠くで銀時と美琴の言い合いを眺めていた。

「何やら言い合いをしてますわね……」

黒子は銀時と美琴が言い合ってる姿を見て言う。

「御坂さん…結構言われちゃってますね」

初春も作り笑いを浮かべながら言う。

（あれ…でも気のせいかな、結構まともな言ってるんじゃない？）

佐天は首を傾げながら銀時がまともなことを言っているのではない
かと思う。

「ふ…ふっざけんなあ！」

バチバチ

美琴は怒りが爆発し体中から青白い電気がバチバチという音を鳴ら
しながら出てくる。

「え…バチバチって…え、電気？…って！お前昨日のビリビリ娘
か！？」

銀時は美琴が昨日、自分に電気を当てようとした人物であることに
気づく。

ちなみに銀時はいやなことはすぐに忘れるタイプの人間で人の名前
を忘れる上、名前を間違えてその人を怒らせてしまうことがある。

「あんた…もう嫌でも勝負してもらっわよ！」

だが、美琴は銀時との勝負のことで頭がいっぱいであった。

バチバチ

（オイイイ！ちょっと待てよ！また怒らせちゃったよ！）

銀時はまた美琴を怒らせてしまったことを心の中で思う。

（やべーよこれ地雷だったよ、いつものノリで調子のりすぎたよ、しかもあいつ昨日、俺に電気浴びせようとしたやつだし…どうすんだ俺エエエ！！？）

銀時は青ざめた顔で美琴を怒らせてしまったことに後悔する。

「……………」

「…何も言わないってことは勝負を受けたってことでいいのかしら？」

考えている銀時だが、美琴から見ればただ黙っているようにしか見えなかった。美琴は黙っている銀時に勝負を受けたと解釈しているのかと尋ねる

（何とかコイツの怒りの火を鎮火させねーと…何かないか？）

銀時は美琴の怒りを鎮めようといういろいろと考える。

「待て、一旦落ち着こう？うん、一回止めよう？」

銀時は美琴に落ち着くように促す。

「何よ今更……」

美琴は銀時の申し出に眉をひそめる。

「いや…お嬢さんがピカチュウみたいでかわいいなーなんて……」

銀時は左手で頭の後ろをかき、作り笑いを浮かべながら言う。

「……………」

美琴は頭を俯かせながら黙る。

「……………あれ？」

銀時は作り笑いを保ったまま美琴を確かめる。

「……………また、あたしをガキだって馬鹿にしてんのかあんたはアア！」

美琴はさらに怒りのボルテージを上げた。

（逆効果だったアアア！鎮火するどころか火にガソリンぶっかけちまったアアア！）

銀時は心の中で逆効果であったことをツッコむ。

（もうやるしかねーのか…めんどくせーことになっちまったな…）

銀時はもうやるしかないと思う。

「安心しなさい…レールガンは使わないであげるわ、死にたくはないだろうし」

美琴は『レールガン』は使わないと言い出す。

（レールガンって何？もしかしてとっておきってやつか？とすればあの電撃よりも強力ってことか…やべーよ！これ真正面からやり合ったら絶対死ぬよ？）

銀時はレールガンが美琴のとおきであることを思う。

（何か手は……あ）

銀時は何かを思いつく。

「わーったよ、勝負すりゃいいんだろ？」

銀時は勝負の申し出を言う。

「ようやくその気になったわね…！」

美琴は腕を組みながら待っていましたと笑む。

「勝負はあっち向いてホイな」

銀時は勝負をあっち向いてホイと提案する。

「アンタ…どんだけあたしをおちよくってるの？」

美琴は目を細めながら銀時を睨み付ける。

「あれ？なに逃げんの？粹がつてたくせにあっち向いてホイが怖いんだ？」

銀時はにくつたらしい笑みを浮かべながら美琴を挑発する。

「あんなのただの運試しじゃない！」

「テーマはあっち向いてホイの奥深さがわかってねーな…まあいいよ、別に逃げてても」

「……………」

美琴はあっち向いてホイをやることに否定するが、銀時はあっち向いてホイの奥深さがわからないと言った後、美琴に逃げてもいいと言う。

美琴はしばし、顎に手を当て考える。

（旦那さん…さすがにこれは無理かと……）

ウォッチが心の中で諦めかける。

「いいわよ…そこまで言うならやってやろっじゃない！」

（食い付いたアア！？あの子、予想外に乗ってきちゃったんだけどオオオオオオ！！）

「な、なんかあっち向いてホイで勝負するみたいですね……………」

遠くで見ていた佐天は銀時と美琴があっち向いてホイで勝負することを知る。

（お姉様…だんだんあの殿方のペースに巻き込まれてますの…）

同じく遠くで見ていた黒子は慕ってる美琴が銀時のペースに巻き込まれてる姿を見て少し呆れた表情になる。

「じゃーやつぞ、じゃーんけーん」

銀時がジャンケンを始めようとする。

「ポン！」

銀時はパー　美琴はグーを出す。

「よっしゃアア！」

勝った銀時はガッツポーズをする。

「ぐっ…でもこれを凌げば良いんでしょ！」

ジャンケンに負けた美琴は悔しそうな顔をするが、あっち向いてホイを凌げばよいと勝ち気になり銀時に挑む。

「いくぜ…あっち向いて……」

銀時が言つと銀時と美琴のまわりに緊張が走る。

「…………ゴクッ」

美琴は銀時の顔を見ながら固唾を呑む。

「……………」

銀時も珍しく真剣な表情で美琴の顔を見る。

ゴゴゴゴゴゴ！！

（何…この緊張感…これが真のあっち向いてホイなの…？）

美琴は緊張を感じこれが真のあっち向いてホイと思い、額から汗が一筋流れる。

（はたから見たら実にシュールな光景ですわね……）

黒子は心の中で銀時と美琴のあっち向いてホイというシュールな光景をツツコむ。

「よお…お前レールガンってのが使えるって言ったな？」

銀時が美琴に話しかける。

（話しかけてきた？あたしの注意を逸らすつもり…？）

美琴は銀時が自分の注意を逸らすために話しかけてきたのだと心の中で思う。

「…それがどうしたの？」

美琴が尋ねる

「そりゃ奇遇だな、ちょうど俺も大砲持ってたよ」

銀時が不敵な笑みを浮かべながら言う。

「え……？」

美琴は銀時の発言に驚く。

「男つてのは誰でも股間にバズーカ搭載してんだよ…そいつを今見せて…」

銀時は下ネタ発言をした後、ズボンのチャックに手をかける。

「なっ……ななな何しようとしてんのよアンタは！」

銀時の行動を見た美琴は顔を真っ赤にして、銀時を見ないように右を向く。

「ホイ」

銀時は指を右側にさす。

「……………あ」

美琴はしまったと言いたそうな顔をする。

「はい、じゃあ俺の勝ちな」

銀時は自分の勝ちと宣言する。

「ちょ、ちよつと待ちなさい！こんなの卑怯よ！」

美琴は銀時がやったことに抗議する。

「なーに言ってるんだ、お前が勝手にそっぽ向いたんだろうが」

銀時は反論を言う。

「あんなことされたら誰だって顔背けるに決まってるじゃない！」

銀時がやったことを思いだし顔を赤くさせながら美琴は言う。

「あんなこと？ホワッツ？俺ア社会の窓が開いてないか確認しただけなんだけど？」銀時は肩をすくめながらこまかす。

「納得行くわけないでしょそんなの！一歩間違えればセクハラよ！？」

銀時のやったことに美琴は納得がいかず、さらにはセクハラだと訴える。

「わーったよ…パフェでも奢ってやるからそれで良いだろ」

美琴がうるさく感じた銀時は静かにするためにパフェを奢ってやると言う。

「パフェって…そ、そんなのに釣られるとでも…」

「いやーどうもご馳走になります！ねっ、初春？」

美琴が納得がいかに言おうとすると佐天たちが美琴の後ろから現れる。

「は、はあ…そうですね……」

佐天の言葉に初春は戸惑いながらもそうですねと答える

「え…いや誰なの君たち？てか」

銀時は突然現れた佐天たちが誰なのかわからず尋ねる。

「御坂さんの友達の佐天涙子です！」

佐天は元気よく自己紹介をする。

初春「う、初春飾利です……」

初春は緊張しながらも銀時に自己紹介をする。

「ジャッジメントの白井黒子ですの、以後お見知りおきを」

黒子は礼儀よく銀時に自己紹介をする。

（あ…あん時のですの娘）

銀時は黒子があの時にあつた少女であることを知る。

「ちょ…佐天さん……」

「奢ってくれるって言うんだし良いじゃないですか、白井さんもそう思うでしょ！」

美琴は佐天に何かを言おうとするが、別にいいじゃんと答え、黒子にも尋ねてみる。

「はあ…まあ……」

黒子のはつきりしない言葉と答える。

「いやあの…正直お前ら全員奢る金なんかないんだけど？」

「じゃー早速行きましょうか！」

銀時は全員分のパフェを奢る金がないと言いが、佐天は美琴と銀時を引っ張りながらファミレスへと向かう。黒子と初春も佐天たちに続くようについてくる。

「ねえ、金がないって言うてるんだけど？首くくらせる気？何これ
新手のいじめ？」

銀時はツッコむもそのツッコミも虚しく、誰の耳にも入らなかった。

『初日から大変ですね旦那さんも』

銀時がパフェを四人分奢られることになってしまいウォッチは慰めの言葉をかけた。

第四訓 あっち向いてホイ！（後書き）

シロ「質問まだかな？」

第五訓 電気を大切に（前書き）

シロ「3…2…1…スタート！」

第五訓 電気を大切に

同日、広場のベンチ

「あーおいしかったあ！ご馳走様！」

初春と共にベンチに座ってる佐天は喜んだ表情でお腹をさすりながら言う。

「こちとら財布がすっからかんだよ…テメーら遠慮なく食いやがって」

佐天と初春が座っているベンチの前に仁王立ちしている銀時はたらくパフエを食った佐天たちを睨む。

「まあまあ銀さん、そう怒らないで」

佐天は銀時の怒りを鎮めるために宥める。

「銀さん？」

同じく銀時の隣に立っている佐天が銀時のことを銀さんと呼んだことに首を傾げる。

「名前が銀時だから銀さん！銀時先生って何だか呼びにくいし」

佐天が銀時のことを銀さんと呼ぶ理由を説明する。

「そ、そう……まあ別にいいけどさ」

美琴は納得したあと、別にいいと答える。

ドッカーン！！

シャッターがしまっている銀行のシャッターが爆発してあたりに爆音が響く。

「……！！」

美琴と黒子は爆発に気づき銀行の方を見る。

「な……何！？」

佐天は耳を塞ぎながら何かと叫ぶ。

「……治安ワリーなこの街」

爆音などに慣れてる銀時は気にせずになが治安の悪い街だと答える。

「初春！アンチスキルに連絡を！急いでくださいな！」

黒子は初春にアンチスキル即ち学園都市の警備員に連絡をとるようにな初春に言いながらポケットからジャッジメントの腕章を出し、腕章を袖につけ、柵を飛び越え銀行の方へと向かう。

「は、はい！」

初春は黒子の言うことに従い、アンチスキルに連絡する。

「黒子！」

美琴は向かっていく黒子の名前を叫ぶ。

「お姉様…これはジャッジメントのお仕事ですの」

黒子は美琴が来ないようにジャッジメントの仕事だという。

「分かってるわよ…！」

美琴は大きな声で答える。

「…では」

そう言いながら現場へと向かう。

「……オイ、一人で行かせていいのか？あのツインテール」

銀時は隣にいる美琴に尋ねる。

「黒子はジャッジメントだから…こういうのは慣れっこよ」

美琴は問題無しといった表情で答える。

「急げ…もたもたするな！」

爆煙の中から厳つい顔の三人の強盗グループが出てくる。そして、現場から逃げだす。

「お待ちなさいな…ジャツジメントですの！器物破損、強盗の現行犯で拘束します」

犯人グループの前から黒子が現れ、強盗グループの逃げ道を妨害する。

「………」

「……プッ…ブワハハハ！！！！」

強盗グループは自分たちを拘束するといった黒子を笑う。

黒子は急に笑った強盗グループに驚くもすぐにジト目で犯人グループを見る。

「オイお嬢ちゃん！そこどけよ、怪我したくなかったらなあ！」

強盗グループの1人が黒子に近づき殴りかかる。

「はあ…そういう三下のセリフは…」

黒子はうまくかわし合気術で相手の力を利用し殴りかかった腕を掴み投げ技の要領で相手を投げ背中から地面に叩きつける。

ブンッ

「ぐあっ！？」

叩きつけられた強盗は声を出したあと力尽きて気絶する。

「死亡フラグというのをご存知ありませんの？」

（実践型の合気道…あのツインテールやるじゃねーかオイ）

銀時は心の中で黒子の合気道を感嘆する。

「ダメです！今この広場から出ちゃ！」

「でも！私の子供が……」

銀時の近くで、初春が女性を止めていた。

「ん？」

「どうしたの？」

銀時が初春と女性の行動に気づき、美琴がどうしたのか尋ねる。

「子供がいないんです！車の中に忘れ物をしたと……！」

母親の視線の先にはドアが開きっぱなしの車があった。

「そんな……！」

「……みんなで手分けして探しましょう！」

初春はこうなった状況に驚き、美琴は皆で手分けして探そうと提案する。

「さて…まだ抵抗しますの?」

黒子が残った強盗グループを挑発する。

「くそがつ!」

強盗は黒子の挑発に乗り、怒りに任せ殴りかかろうとする。

「まだ分かりませんのね…」

ヒュン!

黒子のため息をついたあと、黒子の姿が消えた。

「!?!」

(しゅ、しゅしゅ瞬間移動した!?何アイツ!ヤードラット星人!?)

驚愕の表情で銀時は心の中で黒子が某メガヒットマンガに出てくる宇宙人だと思いながら驚いていた。

「ちょっとあんた…黒子の能力に感心しないで早く探しなさいよ」

車の中で子供を探している美琴は銀時に注意をする。

「うーん…そんな遠くには行っていないと思うんだけど…あれ？あそこ
に誰か……」

佐天はしゃがみ込み、柵の下に生えてる垣根の調べて子供がいない
かと確かめていた。ふと、顔を上げ前を見ると誰かがいるのを見つ
けた。

「何だお前…ちょうどいい、一緒に来い！」

「お兄ちゃん誰なの？」

「いいから来いって！」

佐天が見たのものは男の子を見つけ、その男の子を連れ去ろうとす
る強盗の姿だった。

「！？あの…」

銀時と美琴に助けを求めようと二人を呼ばうと後ろを向くが、呼ん
だら間に合わないと判断した佐天は強盗と子供の方を向く。

（私だって…私が助けなきゃ！）

佐天は表情を険しくさせな助けなきゃと決心する。

「いないわね…一体どこにいるのかしら」

車の中を探し終えた美琴は車から出てくる。

「広場の中にいるんじゃないの？かくれんぼしてんだよ多分」

銀時は広場の方を向きながら呟く。

「何でお母さん相手にかくれんぼするのよ！少しは真面目に……」

美琴は銀時にツツコミ、叱ろうとする。

「何だお前！」

叱ろうとした美琴の声を遮ったのは強盗の声だった。

「え？」

「何だ？」

銀時と美琴は声のした方を見る。

「ダメ！この子に手を出さないで！」

そこには、子供を強盗から必死になって取り返そうとしている佐天の姿があった。

「！」

（しまった…まだ仲間が…！）

黒子は驚いた表情をしながら心の中で強盗グループがまだいたことに気づく。

「チッ、このガキはもういい……どけっ！」

ガッ

「うあっ……！」

強盗は佐天のことを蹴飛ばし、佐天は抱いている子供と一緒に後ろに飛ぶ。

「「！」「」

蹴飛ばされた佐天を見た美琴は表情を険しくさせ、銀時は眉を上げる。

「くっ……」

黒子も自分の友人が蹴られたことに腹を立て、齒を噛みしめる。

「黒子！……こつからは私の個人的な喧嘩だから」

「お……お姉さま………？」

黒子は急に前に出てきた美琴に驚く。

「手エ出すんじゃないぞ……！」

同じく銀時も木刀を抜きながら黒子の前に出てきて美琴の言葉に繋

がるようなセリフを言う。

「あんたも引っ込んでなさい」

「いやここは俺の見せ場だから、お前が引っ込んでろよ」

「いや私のほうが見せ場だから」

「いや俺の見せ場のほうが駅から近い」

「いや私の見せ場のほうが駅から近いし、しかも速い」

「いや俺の見せ場のほうが駅から近いし、お前より速い、しかも運賃が安い」

「……………」

黒子は銀時と美琴のアホな言い合いをジト目で見ていた。

「くそっ…このまま引き下がるかよ！車でテメエらまとめて…」

強盗はあらかじめ用意していた車に乗り込みエンジンをかけ、美琴と銀時に突っ込むとする。

「ちょうどいいわ…見てなさい、これが…超電磁砲レールガンよ！」

美琴はポケットからゲームセンター用のコインを取り出す。

「あつ！テメツ！俺の見せ場潰しやがって…」

銀時は美琴が自分の見せ場をとったことに怒る。

「いいじゃない…こんなに近くで私のレールガンを見られるんだから」

美琴は銀時を宥める。

（こういうのに限って実物は大したモンじゃ…いやでもフェイトやなのはも砲撃とか出してたよな…いやでもあいつらにはデバイスつてもものがあるから出せたわけだし…デバイスがないあいつに…）

銀時は心の中で思っていると、美琴が親指でコインを上には飛ばし、落ちてコインを親指で弾くとコインがオレンジ色のビームへと変わり、ビームはコンクリートでできた道路を抉りながらまっすぐ強盗の車へと向かっていった。

キーン…バシュ！

「なっ…」

銀時はレールガンに驚く。

ズガンー！！

レールガンは車に着弾し、車は縦回転しながら吹っ飛び、銀時と美琴の上を通りすぎた。

「……」

銀時はレールガンの威力を見て声が出ないほど驚いていた。

「どう…私のレールガンは？」

美琴は得意げな顔で自分のレールガンはどうだったかと尋ねる。

「……ま、まあまあだな、うん」

（今のレールガンの威力は確かにスゲーな、こりゃあなのはとフェイトといい勝負だな…）

銀時は答えた後、なのはとフェイトの砲撃を思い浮かべる。

「もしかしてビビった？」

美琴はニヤニヤと笑いながら銀時に尋ねる。

「ビビった？え、意味が分からないんだけど？何かビビることなんてあった？っーかそのニヤニヤ止める！」

銀時は美琴の質問を否定し、見苦しい言い訳をする。

「恐かったんだ？」

美琴はニヤニヤ笑いながら再び尋ねる。

「恐い？何それ？恐いって感情が俺にはよく分からないんだけど？っーか似たようなもん何回も見てるし俺」

銀時はまた見苦しい言い訳をする。

「またあの二人は…本当に凸凹コンビですよ」

（それにしても今回の強盗の能力…何か不自然に強力だったような…）

二人の後ろにいた黒子は呆れた表情で、呟く。

その後、戦っていた強盗の能力が不自然に高かったことを感じた黒子は顎に手を当て考える。

「ありがとうございます…本当にありがとうございました！」

子供の母親は何度も頭を下げお礼を言う。

「お姉ちゃん、ありがとうございます！」

子供も頭を下げお礼を言う。

「そんな…いいって…！」

佐天は両手を振り照れながら言う。

「頑張ったわね、佐天さん！」

美琴は佐天に近づき、声をかける。

「御坂さん…」

佐天は美琴の方を向く。

「お疲れ様、かつこよかったよ！」

美琴は佐天に労いの言葉をかける。

「……………」

しかし、佐天は黙っていた。

「…佐天さん？」

美琴は黙ってる佐天を見て、美琴は首を傾げる。

「……………」ごめんなさい…今日はちょっと先に帰ります」

「え？う、うん…」

佐天の言葉に美琴は一瞬戸惑うも、すぐに承諾する。そして、佐天はこの場を去った。

「佐天さん？」

「……………」

初春は去っていく佐天を見ながら佐天の行動に首を傾げ、銀時は去っていく佐天を黙って見ていた。

第五訓 電気を大切に（後書き）

作者「時系列が違うってツッコまないでね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2894y/>

とある侍の銀魂 (シルバーソウル)

2011年11月21日12時41分発行